dec monthly vol.460
2024年1月1日発行
発行人 編集人 倉内 公嘉
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL http://www.decnet.or.jp/ E-mail dec_info01@decnet.or.jp
〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

notice

第23回「野生生物と交通」研究発表会のお知らせ

第23回「野生生物と交通」研究発表会を札幌市で開催いたします。野生生物と交通に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。詳しくは、ウェブサイト(http://www.wildlife-traffic.jp/)をご覧ください。

〈開催日〉2024年2月28日(水)10:30(予定)～
〈会　場〉札幌市民交流プラザ クリエイティブスタジオ
(札幌市中央区北1条西1丁目さっぽろ創世スクエア3F)

Zoomによる同時配信(聴講のみ)

申込項目	参加費等	お申込み締切
会場聴講(定員:200名)	無料	2024年2月16日(金)
懇親会(定員:50名)	5,000円(予定)	2024年2月16日(金)
講演論文集[事前予約]	2,500円(当日販売)	2024年2月16日(金)

お申込みはこちら▶
※ウェブページの申込みフォームもご利用ください

オンライン聴講をご希望の方は、事前登録が必要です(無料)。登録方法につきましては、プログラム確定後にウェブページに掲載いたします。

お問合せ
(一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会係(担当:鹿野・向井)
TEL:011-738-3364　FAX:011-738-1890　E-mail:wildlife@decnet.or.jp
ウェブサイト:http://www.wildlife-traffic.jp/

dec設立40周年記念事業

冬のくらしアイデアコンテスト 発表会

参加無料

お申込みはこちら▼
お申込みフォーム

〈開催日時〉2024年2月29日(木)14:00～17:00(受付13:30より)
〈開催場所〉札幌市民交流プラザ クリエイティブスタジオ
(札幌市中央区北1条西1丁目さっぽろ創世スクエア3F)
〈定員〉100名 ※定員になり次第締切ます。

「冬のくらしアイデアコンテスト」は、次世代の社会の担い手とともに「北海道における持続可能な冬の暮らし」について考える機会とし、令和5年7月より大学生等からアイデアを募り、全国から31件の応募がありました。そのうち一次審査を通過した5件のアイデアを学生たち自ら発表いただく場として発表会を開催することとなりました。これからの時代に望まれる冬の暮らしのあり方を参加者のみなさまと共有したい思います。ぜひ、多くのご参加をお待ちしています。

発表内容
- **第五の公営競技「競雪(けいせつ)」**[北海道大学大学院]
- **幻想的な空間で個別映画館-movie in ice-**[大阪大学]
- **Snow Safety Stick**[茨城工業高等専門学校]
- **ゆきんこお野菜冬畑**[北海商科大学]
- **愉雪の巡い(ゆうせつのうつろい)**[札幌市立大学]

審査員
高野 伸栄 氏 [北海道大学大学院工学研究院 土木工学部門 教授]
柿崎 恒美 氏 [国土交通省 北海道開発局 局長]
宮口 宏夫 氏 [(株)北海道新聞社 代表取締役社長]
鈴井 貴之 氏 [Creative Office CUE タレント]
倉内 公嘉 [(一社)北海道開発技術センター 理事長]

プログラム

13:30	開場・受付
14:00	開会(主催者挨拶・審査員紹介)
14:10～15:40	二次審査会
15:40～16:10	弦楽四重奏ミニコンサート「弦で奏でる四季の音色」 佐藤 郁子(ヴァイオリン) 冨田 麻衣子(ヴァイオリン) 青木 晃一(ヴィオラ) 坪田 亮(チェロ) ※この間審査員よる最終審査を行います。
16:10～16:30	休憩・場面転換
16:30～17:00	審査結果発表・表彰式
17:00	閉会

【主催】一般社団法人 北海道開発技術センター
【協力】株式会社 北海道新聞社/株式会社 エフエム北海道AIR-G'/認定NPO法人 ほっかいどう学推進フォーラム/一般社団法人 シーニックバイウェイ支援センター
【後援】国土交通省 北海道開発局 北海道 札幌市

編集後記

明けましておめでとうございます。本年もdecマンスリーにお付き合いいただけますようどうぞよろしくお願いいたします。さて、おめでたいといえば昨年12月23日(土)に「令和5年度手づくり郷土賞(国土交通大臣賞)受賞記念発表会」が東京都で開催され、シーニックバイウェイ北海道「函館・大沼・噴火湾ルート」の活動団体でもある「函館花いっぱい道づくりの会」(代表:折谷久美子さん)が「はこだて花かいどう」の活動で「ベストプレゼン賞」を受賞されました！大変おめでとうございます！！！(M.K)

受賞の様子

News letter since 1985 01 JAN
Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2024.1.1 vol.460 デックマンスリー

● Monthly Topic(マンスリートピック)
〈鼎談〉これからの北海道 ～インフラと観光～
● dec Report(デックリポート)
五感で「空ヲ知ル」空知ing!!アイデアソン開催報告

新年のごあいさつ>>> 一般社団法人 北海道開発技術センター 会長　高野　伸栄

明けましておめでとうございます。
本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

新年明けまして、おめでとうございます。さて、新春早々厳しい話で恐縮ですが、2024年は猶予されてきた働き方改革が、建設及び運輸業界にも適用されることになります。これら業界における人手不足は極めて深刻で、建設物価の高騰ともあいまって、建設工事は予定通り進められず、又多くの都市でのバスの減便が行われようとしています。2024問題はこれらを一層難しくすると考えられます。

また、昨年の夏は北海道においても、これまでにない猛暑に見舞われ、最高気温は36度を超え、北海道の夏は過ごしやすいというのも幻想となりつつあります。いよいよ地球全体の異常気象が目に見える形で現れてきているといえそうです。

これらの解決には、DX、GXといわれる抜本的な社会経済システムチェンジが必要と思われます。

私ごとで恐縮ですが、ここ数年足腰が不調で、特に階段を昇る時に苦労が伴いました。整形外科で、変形性股関節症と診断され、手術を除けば、当面の治療は痛み止めの服用か、ヒアルロン酸の注射しかないと言われました。薬漬けはたまらんと、股関節症の改善の本を読みあさり、体操やストレッチをいろいろ試しましたが、一向に効果は現れません。このような中、あるストレッチによって、かなりの改善が実感できました。それは股関節症対策ではなく、姿勢を改善し、動かなくなっている筋肉に動き方を思い出させるというものでした。この改善で今まではできなかったストレッチが可能となり、さらに、歩き方を全面的に変更することができました。まだ、完全とはいえませんが、今は階段も小走りも問題ない状況です。大げさな言い方で恐縮ですが、出会ったストレッチは、私にとって、小さな出来事が大きな変化を及ぼすバタフライエフェクトをもたらしてくれました。

DX、GXというとどこから手をつけていいのかなかなか分かりにくいものですが、まずは少しでいいので、改善に向けた一歩を踏み出すことが重要だといえそうです。言い古されたもので恐縮ですが、「一年の計は元旦にあり」と言います。新年にあたって、自分、家族、所属組織、社会のこと、何でもいい、バタフライエフェクトをもたらすかもしれない一歩をどのように踏み出すのかを考えてみませんか？

鶴雅ホールディングス株式会社、
鶴雅リゾート株式会社、鶴雅観光開発株式会社

取締役副社長
大西　希 氏 おおにし　のぞみ

1982年釧路市(旧・阿寒町)生まれ。聖心女子大学卒業後、(株)阿寒グランドホテル(鶴雅グループ)入社。台湾、シンガポールの旅行社などで研修後、旅館支配人、鶴雅グループ札幌事務所長などを経て2016年より鶴雅ホールディングス(株)取締役副社長。

岩田地崎建設株式会社

取締役副社長執行役員 北海道本店長
岩田　幸治 氏 いわた　こうじ

1983年札幌市生まれ。法政大学卒業後、東京の不動産会社などに勤務後、2012年岩田地崎建設(株)に入社。東京支店勤務の傍ら慶応大大学院でMBA取得。16年に同社札幌本社に赴任。20年取締役副社長執行役員管理本部長、22年より現職。

(一社)北海道開発技術センター

理事長
倉内　公嘉 くらうち　きみよし

1962年芦別市生まれ。86年室蘭工業大学大学院修了後、北海道開発庁入庁。2016年小樽開発建設部長、18年北海道開発局建設部長、19年国交省大臣官房審議官(北海道担当)、20年北海道開発局長。21年7月退任後、dec顧問を経て22年より現職。

dec設立40周年記念特別企画

鼎談 | これからの北海道 ～インフラと観光～

2024年がスタートしました。dec設立40周年を記念して北海道への思いあふれる鼎談をおおくりいたします。お迎えしたのは北海道を牽引する代表的な企業の責任的な立場であられ、さらに次代の活躍が期待される若き経営者のお二人、岩田地崎建設株式会社の岩田幸治さんと鶴雅グループの大西希さんです。decの倉内公嘉理事長と語り合っていただこうと掲げたテーマは「これからの北海道」。とはいえ、来し方を振り返っての思い出、今、直面する課題、新年の抱負、はたまた趣味の楽しみ、とお話は途切れなく展開しました。北海道の明日を考える上で示唆に富む歓談の模様をお伝えします。

【インタビュー】原 文宏〈(一社)北海道開発技術センター 理事、地域政策研究所 所長〉　【文】木村 篤子

大西さんと岩田さんは同世代。倉内理事長は20年ほど年長ですが、みなさん、北海道生まれです。まずは生い立ちについてお聞かせくださいますか。

◆大西　家業の温泉旅館がある阿寒湖温泉の出身です。小学校までは阿寒湖温泉で、その後は札幌聖心女子学院中学・高等学校で6年間、寮生活を送りました。残念ながら閉校(2025年)になりますが、とても良い時間を過ごさせていただいたと思っています。

中学三年のとき、旅館の女将を務めていた母を交通事故で亡くし、そのことが旅館を継ごうという決意のきっかけとなりました。観光関連の勉強をしたいと思い、聖心女子大学では文化人類学を専攻しました。ところが、そこで学んだのは「観光は伝統的な文化を破壊する行為」という否定的な考え方。地方創生、文化発展の手段として学ぶ環境ではなかったため、観光がもたらす負の側面を知ることは辛かったですが、多様な視点をもてたことは非常に良い経験でした。

◆岩田　札幌市内で育ち、札幌光星高校を卒業しました。そのころは全く会社を継ぐ気持ちはなく、父も継がなくていいと言ってくれていました。当時、夢中だったのは山際淳司の『江夏の21球』に代表されるスポーツノンフィクション。マスコミ志望で法政大学社会学部に進学し、CM制作やテレビドラマの研究をしていました。

やがて就職活動を始め、企業の合同説明会に父の会社の東京支店も参加していたので、少し会社のことを知ってみようと出かけたところ、名前を書いてしまったこともあり身元がバレました(笑)。以来、東京支店に足を運ぶうちに、古参の社員から「小さいときにダッコしたぞ」と声をかけられたりして、自分はこの会社に育ててもらったという思いを新たにしました。やがて会社と社員を大事にしたいという気持ちから将来を決めました。

◆倉内　芦別市生まれで、三井石炭の炭鉱の第一坑と言われた町の炭坑住宅に暮らしました。木造の四軒長屋で、隣りの音も筒抜け、サッシのない木枠の一重窓で隙間だらけ。冬は外からビニールを貼らないと寒くていられないという住環境でした。石炭手当は現物の石炭で石炭箱に入れておくと冬は凍ってしまい、それをツルハシで砕いて家に運びました。冬の夜、石炭ストーブの火が消えてしまうと室内は冷え切って、朝にはふとんの顔の周りが白く霜で凍っている。よくあんな不便で生産性の低い暮らしをしていたなあと思いますね。

芦別高校を卒業後、室蘭工業大学の工学部土木工学科に進学しました。高校のときに職業の適性検査を受けたところ、「公共性に富むような仕事が向いている」と出たのです(笑)。便利で快適な世の中にしたい、という切実な思いもあり、多くの人の役に立つ仕事をしようと選んだのが土木工学。さらに国家公務員になれば、幅広く世の中の役に立てるのではないかと考え、公務員試験を受験して役所に入りました。

大西さん、岩田さんは、それぞれ自社に入る前に他社、他業界で修業経験を積まれていますね。駆け出しのころの思い出はいかがですか。

◆大西　大学卒業後すぐに阿寒湖温泉に戻り、数カ月のフロント業務の後、担当したのがパン屋さん(パン工房「パン・デ・パン」)でした。これは町の空き店舗を弊社が譲り受けて、それまで地域になかった「花屋、本屋、パン屋」のなかから選んで開店したのです。パン職人に来てもらってゼロからの店づくりをし、経営に携わりましたが、小売業は旅館とは異なる繊細なコスト管理が必要で、経営を安定させるのは本当に大変でした。

パン・デ・パンの外観

道産小麦と阿寒の
おいしい水で
作られるパン

ただ、ちょうどシーニックバイウェイ北海道の活動が始まったころで、お店を「シーニックカフェ」に指定していただいたのですね。シーニックの活動は、スタンプラリーなどの催しを通じて地域をつないで広域で観光を考える大切さ、楽しさを教えてくれた原体験です。

その後、観光業の勉強で台湾に2カ月、シンガポールに半年、現地の旅行社に受け入れていただき、日本への添乗業務などに携わりました。これは外から北海道の魅力や価値を知る

上でとても良い勉強になりました。

◆岩田　大学を卒業してから1年間、米国シアトルに留学し、ビジネス関係の勉強をして東京に戻り、デベロッパー会社に就職しました。東京や大阪の都心の再開発にかかわる大型事業を手掛ける会社ですが、入社1年目は根性試しという感じで、関西でマンション販売の戸別訪問をやらされ、コミュニケーション能力を大いに鍛えられました。2年目に東京に戻ったのですが、なんと会社がサブプライムローンのあおりを受けて倒産。破産処理の補助事務などもしましたが、本当に貴重な体験でした。

その後、財閥系の法人向け不動産仲介の会社に入り、いろいろな法人の不動産の評価や売却を行う仕事で3年間勤務しました。大企業の内部事情を垣間見るなど民間企業の濃い部分を知る上で非常にいい経験だったと思います。その後、自社の東京支店に入り4年間勤務しましたが、うち2年間は慶応大の大学院で学びMBAを取得しました。経営判断のトレーニングを積み、人脈を広げる意味でも有意義な年月でした。

第8期北海道総合開発計画にあるように、北海道は「世界水準の観光地形成」を目指しています。「観光とインフラ」について現状や可能性をどう見ておられるでしょう。

◆大西　北海道にとっての最大の魅力は「広さ」です。それはチャレンジすべきポイントでもあり、弊社にとっては道東まで来ていただくための魅力をどうつくっていくかという大きな課題です。シンガポールの旅行社でレンタカーによる道内ドライブツアーのアテンドをしたのですが、国土の狭い同国のお客様にとって雄大な北海道の道を車で移動すること自体が魅力であり価値なのですね。これこそ新たなインバウンド観光のスタイルだと気づかされるとともにシーニックバイウェイの活動とのつながりを感じました。

◆倉内　洞爺湖温泉の宿泊もできるシーニックカフェに行ったとき、経営者の方に聞いたところ、お客の8割が外国人。足はほとんどレンタカーでした。ただ、国内の調査など見ると、若者と女性は公共交通のニーズが高い。北海道運輸局が道東の主要バス会社と連携してつくったサイト「バスや鉄道で旅するひがし北海道交通ネットワーク」は画期的で、こういうものが求められていると思います。ただ、公共交通は地元の利用者第一ですから、過疎が進むと利便性が悪くなる。また、運転手不足も深刻な問題です。建設業も含めた社会全体でこれらの課題に向き合う必要があると思っています。

◆岩田　建設業にとって地域の宿泊施設は大事で、大きな工事になると工事関係者が現場近くに1年以上宿泊します。施設がなければプレハブの仮設になります。今は観光業でもキャンプが人気だったり、バックパッカー向けのプレハブハウスが登場したりするなど、ラグジュアリーホテルの一方で、不便さを楽しむような流れもある。観光は両極化していますね。

◆大西　コロナ禍以降、不便さを自然のなかで楽しむという志向が高まりました。キャンプやカジュアルな施設を通じて新たな北海道の魅力が生まれることはいいことだと思います。

自然とのふれあいを重視する観光ということでは、今年、北海道でサミットが開催されたアドベンチャーツーリズム（AT）のトレンドもあります。弊社が「アドベンチャー事業部」を開設したのは2017年。長いものでは1日かけて自然や地域文化を楽しむようなメニューを紹介、提供し、より深くて特別な北海道の魅力を国内外に伝えていきたい想いがあります。

シーニックバイウェイ北海道の活動には各地の建設業関連の方が多く参加されており、建設業と地域づくり、また観光とのつながりの強さが感じられます。

◆岩田　地域の建設業は単に必要なインフラを維持するだけでなく、地域を守り、振興する役割を担っていると思います。それが結果的に自分たちにも返ってくるということですね。

地域の建設会社は公共のインフラから民間の建物まで多様な分野の仕事をするので、自治体や地元の民間事業者とのかかわりも幅広く、地元のことを最もよく知っていると言えるでしょう。地域を盛り上げていくとか、経済的、社会的によくしていこうという責務を自覚している人は多いと思いますね。

◆倉内　地域のことを一番よく知っているのが建設業であり、建設業は地域を愛せないと仕事にならないところがあるのではないでしょうか。地域のために、という感覚で、娯楽施設や飲食業など異業種に乗り出したり支えたりする建設会社の例は多いですね。観光に対しても頼もしい応援団的存在です。そういう意味で建設業はとても懐が深い。各地の建設会社の社長さんたちには頭が下がります。

◆大西　弊社は網走にも施設があるのですが、そこで人気のお土産品のしじみしょうゆも地元の建設業の関連の会社も関わられて製造されています。これは市場に出せず、廃棄すれば水質環境にも影響する規格外品のしじみを活用して商品開発したもので、建設業の地域貢献が観光の魅力づくりになっている例だと思います。

それぞれにリーダーとして長期、短期のさまざまな目標をお持ちだと思うのですが、2024年について期するところをお聞かせください。

◆大西　ここ数年、コロナ禍でも立ち止まらないように新しい施設づくりにチャレンジしてきました。そのなかには一棟貸しの施設（「阿寒Terrace」）やオホーツク文化をテーマにしたグランピング的な施設（「北天の丘あばしり湖リゾート」）などがあり、そうした施設を絡めながら新しい旅を提案していくのが今年のチャレンジだと思っています。

それと、アフターコロナで最も変わったことは急激な人材不足です。海外から働きに来てくださっているスタッフも一気に増えました。観光業界全体が海外人材を必要とする傾向が強まっていますが、インバウンドを多く迎えたいと思う同じ熱量で、海外から働きに来る人をより良い環境で受け入れる努力をしなければと思っています。今年はそうした人材の多様性を生かして、北海道全体のおもてなしがグローバルに進化する、そんな元年になると思います。

◆岩田　「2024年問題」がありますから、まずは働き方の見直しを進め、若い人が入ってきやすい環境をつくる第一歩の年にしたいと思っています。そのためにはデジタル化が非常に重要で、以前はICTの取り組みとして現場の作業効率化を主眼に進めてきたのですが、現在は全社的なDXに向けて体制を組んで推進しようとしています。まずはデジタル・リテラシーが全社的に共有されないと新しい価値を生み出すところまで到達できない。その第一歩を進めるのが今年だと思っています。

建設業界は全体的にDXが他業種より遅れており、現場よりむしろ事務的、基幹的な部分でペーパー中心の手仕事頼みになっています。抜本的に業務を見直すことが必要ですね。

ペーパレス会議の様子

◆倉内　dec設立40周年事業の取り組みとして、高専生・大学生・大学院生対象の「冬のくらしアイデアコンテスト」（最終審査の審査会は2月29日）と、大学生も参加する「五感で『空を知ル』まちづくりワークショップin空知シーニックバイウェイ」（23年10月11～12日）を実施しています。いずれもdecの強みを生かした企画で、皆様に良い評価をいただいています。特に若い人を育てるという視点が良いと思っています。

社会とのつながりがあってこそのdecであり、職員には社会と向き合った仕事をしているのだという意識をしっかり持ち、それぞれのキャラクターを大事にしてほしい。それを生かす組織にしていきたいと思っています。

それぞれ重責を担われていますが、日ごろ、どのようにリフレッシュされているのでしょうか。ご趣味は。

◆大西　運動は苦手な方だったのですが、マラソンと出会ってから自分のできる範囲で体を動かすのは気持ちがいいと感じています。「北海道マラソン」に参加し、一昨年は20キロ、昨年は25キロでリタイア（途中棄権）。恥ずかしいことではありますが、マラソンがいいのは、成績が悪くても仲間と笑い励まし合えること。競争相手は過去の自分です。マラニックなど道内各地の走るイベントも楽しんでいます。

◆岩田　東京にいたころはハーフマラソンを走っていました。今年は体づくりをして大西さんも参加されている練習会に復帰したいですね。趣味は音楽と読書、ゴルフ、最近はスキー。一昨年、小学生の娘をゲレンデに連れていって久しぶりに滑ったら、これが面白い（笑）。ゴルフもスキーも家から30分で行ける大都市・札幌の凄さをあらためて感じています。

◆倉内　私は全くのインドア派で、読書とカフェめぐり（笑）。スティーヴン・ハンターやクレイグ・トーマス、アリステア・マクリーンなどの冒険小説など欧米の作家が多いですね。落ち着いたカフェで読書するのが無上の楽しみです。

dec設立
40周年記念
特別企画

五感で「空ヲ知ル」空知ing!! アイデアソン開催報告

（一社）北海道開発技術センター　研究員　橋本 澪奈

当センター（以下、dec）は、2023年に設立40周年を迎えました。その記念事業として、参加者が共に空知の地域資源を視察・体験し、「伝えたくなる空知を探す」ことをメインテーマとしたワークショップ（アイデアソン）を、10月11～12日に空知シーニックバイウェイー体感未来道ー（以下、空知SBW）にて実施し、所属や年齢の異なる計32名が参加しました。ここに、概要を紹介します。

1 全体オリエンテーション
【1日目：10月11日（水）】

9時に札幌駅を出発し、最初の視察・体験場所である宝水ワイナリーまでの道中では、今回の企画の趣旨説明、dec倉内理事長からの開催挨拶、dec（事務局）からの参加者紹介と空知クイズの出題を行いました。

2 視察・体験
【1日目：10月11日（水）&2日目：10月12日（木）】

1日目は、空知SBWの活動団体である「宝水ワイナリー」（岩見沢市）の視察・体験からスタートしました。スタッフの方からワイナリーやぶどう畑に関する説明を受けた後、ワインを試飲させていただき、参加者はお土産用のワインを購入するなどしていました。昼食は、空知SBWの活動団体である「すずき農園」が営業する「畑の中のレストラン EKARA」（三笠市）へ。自社農園で栽培された野菜をはじめ地域の食材を使った農園プレートとピッツァを堪能しました。その後は「三笠ジオパーク」（三笠市）に向かい、アンモナイトが海を泳いでいた一億年前から、炭鉱まちとして栄えた現代までを学ぶことができる「一億年時間旅行コース」を、三笠市博物館の学芸員と三笠ジオパーク推進協議会の方のガイド付きで体験しました。

2日目は、国道452号を通って三笠市から芦別市へ。道中では、改めて参加者から専門分野に関する内容を含めて自己紹介いただき、交流を深めました。「星の降る里百年記念館」（芦別市）では、かつて炭鉱によって栄えた芦別のあゆみを、学芸員の方の説明に加え、展示物やジオラマ、マジックビジョン小劇場にて学びました。その後、「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」（赤平市）に向かい、実際に炭鉱で働いていた方のガイドのもと、旧住友赤平炭鉱立坑櫓の内部を見学しました。東公民館でのプレゼン発表会の後は、日本一長い直線道路（国道12号）沿いにある「道の駅ハウスヤルビ奈井江」（奈井江町）に立ち寄り、各々お土産や軽食を購入し、空知SBW工藤代表からは奈井江産の新米などのお土産も頂きました。

空知の地域資源を視察・体験（写真は三笠ジオパークでの様子）

3 アイデアソン
【1日目：10月11日（水）&2日目：10月12日（木）】

1日目の三笠ジオパークの後は、宿泊場所の「三笠天然温泉 太古の湯」（三笠市）へ。「子連れ家族」、「ワーケーション」、「大学生グループ」、「カップル」の4つの対象で参加者をくじ引きでグループ分けし、各々の対象を踏まえ、視察・体験で感じたことなどをもとに空知のお宝（地域資源）を伝えるためのアイデア出しを行いました。（当初2時間の予定のところ、各グループでの議論が白熱し30分延長！）

アイデアソンの様子

分類	人数
大学生（観光系・土木系・教育系）	7名
大学教員（観光系・土木系）	2名
空知管内の地域おこし協力隊	2名
空知管内の学校教員	1名
建設コンサルタント会社の若手職員（まちづくり系・交通系・土木系等）	4名
空知SBW活動団体メンバー 他	7名
dec（理事長、参与、20代職員 他）	7名

【表】空知ing!!アイデアソンの参加者

2日目の赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設の視察・体験の後は、東公民館（赤平市）にて、2日目の視察・体験の内容も踏まえ、「いしの」（赤平市）のお弁当をいただきながらグループで発表内容の整理や資料作成を行いました。

4 プレゼン発表会
【2日目：10月12日(木)】

2日間の締めくくりとして、対象を踏まえたアイデアについて各グループの大学生から発表いただきました。「子連れ家族グループ」は「家族で楽しむ空（そら）ドラ！※」と題して1泊2日のキャンプ旅行を想定し、子連れ家族が参考にできるマップを作成。「ワーケーショングループ」は空知の地域のスペシャリストによるガイドや、田園風景や観光・休憩施設を楽しめるサイクリングの活用を、「大学生グループ」は大学生にとって身近な情報源であるInstagramで『#空知ing』等を用い、訪れたからこそ分かる魅力の発信を、「カップルグループ」は来訪者が身近な人に空知の魅力を発信することで、地域の人と来訪者の輪を広げることができるのではないか、と発表・提案しました。

※空ドラ：空知ドライブ

プレゼン発表会の様子

5 最後に

今回の企画を通して、参加者からは「新しい発見や発想を得ることができた」、「空知の魅力や地域の方々の想いを知ることができた」、「多様な方々と交流できて良い経験となった」、「地域側も大きな気付きを得ることができた」、「今後も継続して実施してほしい」といった声が聞かれました。私個人としても、本企画を通して様々な方と知り合って交流を深めることができ、今後の大きな糧になったのではないかと感じています。引き続きdecでは、世代や地域を超えた交流のお手伝いや、今回提案されたアイデアの実現等に寄与できればと思います。

参加メンバーでの記念撮影！